② 私立中高一貫校の表現

■本間勇人

1—表現者としての私立中高一貫校
2—私立中高一貫校を選択する理由
3—私立中高一貫校の教育実践—横浜中学校のマルチメディア教育に生きる教育理念
4—展望

1—表現者としての私立中高一貫校

❶—エピソード1

朝八時、女子学院の講堂に、二学年の在校生と来春受験を予定している親たちが集まった。やがて、パイプオルガンの調べと共に斎藤正彦院長が講壇に現れ、一同起立して賛美歌一八七番を合唱した。そして院長によって聖書の中の一節が朗読され、話が始まった。

「『見よ、その日が来ればと主なる神は言われる。わたしは大地に飢えを送る。それはパンに飢えることでもなく、水に渇くことでもなく、主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渇きだ。』……身体の健康は食べ物で何とかなるが、心の健康は何によって満たされるのだろうか。今の日本という社会は、飽食の時代を迎えている。でも心は飢え渇いているのではないだろうか。最近のいろいろな惨めな事件はこの飢えと渇きを癒したいという欲望が原因だ。しかし、物質的な欲望はそれを癒しはしない。心は言葉によって満たされる。朝家を出る前に、家庭で言葉を互いに交わしてきたかな。互いを勇気づける言葉をかけあうという日常の会話は大切だ。言葉は情報を伝えると同時に生きる勇気も与えるのだから……。」

院長の話が終わるや祈りが始まり、やがて礼拝は終了。そこに集まっていた受験予定の親たちは、十五分間の礼拝の体験をした。

❷—私立中高一貫校はいかなる表現者か？

エピソード1は、来年百三十周年を迎える女子学院（東京）で行われた来春の受験生の保護者を対象とした学校説明会の始まりの部分である。

プロテスタントというミッション校であるがゆえに、当校が大切にしている教育理念の実践に直接触れてもらい、教育の方針の理解を深めてもらおうというのが目的である。実は、説明会の運営進行方法は、様々であるが、そのほとんどの私立中高一貫校で、女子学院のような意図を持って学校説明会が行われている。

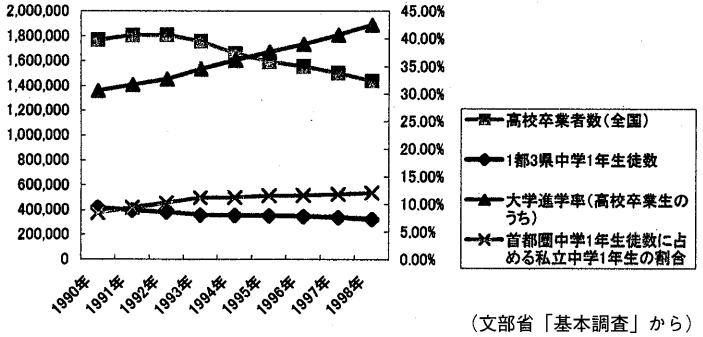
私立中高一貫校は、学校法人という組織形態のNPOである。教育理念に基づいた教育実践を、教師と生徒と保護者が協力し合い、互いに主体的に参加していくというのが前提である。したがって、私立中高一貫校は、選択するものであり、選択のための条件をすり合わせるチャンスの最も一般的なスタイルが、学校説明会であり、入学試験という機会である。

さて、学校説明会の中で斎藤院長は、二〇〇二年以降の文部省が行っていく教育改革によって、ある意味で公立と私立は共通する部分が多くなるだろうとも語る。それは、画一的な教育方法に対する反省とその実行がやっと生まれるだろうし、教育に対するゆとりも生まれるだろうというのである。話の中で、五日制実施と学習指導要領改訂、産業構造の変容にその根拠を求めていた。

しかし同時に、公立と私立の違いはより明確になっていくという点も強調する。

私立中高一貫校の根源的動機は、幕末あるいは明治に生まれた。日本が「近代化」を構築しようという時期である。司馬遼太郎流にいえば、青写真なき「近代化」が驀進していた時期である。戦後の官僚的な「近代化」も基本的には明治の流れを継承していた。実は地方分権に関連する地方自治法の全面改定が行われるまで、この官僚的な要素は、見え隠れしながら存在し続けてきたのだ。だからこそ、一九五〇年代以降から、自治体が官僚的「近代化」を問い返してきたのである。この文脈を想起してもらえば、青写真なき明治維新当時も、「近代化」の多様な捉え方、方向性が存在していただろうということは容易に想像がつくのではないか。つまり、明治以来の

図—1　人口動態と大学進学率・首都圏私立中学進学率



（文部省「基本調査」から）

私学というのは、その当時から「国家」とは違う「近代化」を目指していたのである。

戦後、ある意味で強くなり、日常化した官僚的「近代化」を自治体が問い返しつづけてきた作業は、常識化しているがゆえに困難をきわめただろう。その点では、私学の根源的教育動機は、官僚的「近代化」も発展途上であったのだから、展開しやすかっただろう。

しかし、他者と違う道を歩んできただけで、教育理念をすでにある伝統ということで済ましし、普段から洗い出してはこなかった。

制度的な側面から見れば、二〇〇二年以降公立と私立の差は縮まるだろう。長引く不況と少子化が相俟って、募集はさらに減るだろう。二〇〇二年以降大学は全入とみなされている（前頁図―1）。すなわち、私学は自己批判する局面に立たされている。教育理念をその根源的動機にまでさかのぼり、それをどのように具体的に展開していくかを再構築する時を迎えているのである。

女子学院の斎藤院長は語る。「目に見えない大切な価値やそういう精神性をないがしろにする権力に対し、心を空虚にされない自由を言葉によって保てる自立した人間に育って欲しい。知識偏重の合理主義や教育を世渡りの手段とみなす、功利主義を見破る考える力を養って欲しい。しかし、思い通りになるわけではない。だから、このような教育理念を学院中討議をして、洗い出し、毎朝の礼拝により継承し、各教科の教師が、教科を超えた知恵を生徒たちと分かち合うのだ」

すなわち、私立中高一貫校は、権力的存在に対し常に周辺的存在であり、専門分化に対し常に統合的視野を大切にし、あくなき真実の問い返しを遂行する表現者であることを再認識しなければならない。

2―私立中高一貫校を選択する理由

❶―エピソード2

「犯罪が低年齢化している。自分が他者から《承認》されない不安が原因である。人間が互いに認め合うことは重要なのだ。私が学院生活を楽しめたのは、多くの人から《承認》されてきたからだ。しかし、何を《承認》されてきたのだろう。何を《承認》してきたのだろう。多くの人は、私が女子学院生であるということを《承認》してきた。私もそのことを疑うことなく満足してきた。しかし、そこに私自身の存在そのものはあったのだろうか。大学を選ぶときもブランド名が気になった。学院生活の中で、友人と語り合う中で、やはり人間の存在そのものの重要性に気づいた。女子学院生である前に、〇〇大学生である前に、人間であることを誇りに思って生きていく勇気を持ちたい」

❷―私立中高一貫校を志望する本当の理由

エピソード2は、女子学院の卒業論文集に掲載されていた論文の要旨である。

一九七〇年代以降、マスコミで「受験競争」や「学歴社会」が社会問題として大きく取り上げられるようになってから、中教審や大学審などでも、「受験競争」の緩和策が論じられ、様々な政策が立案、実行されてきた。昨今議論され実行に移されている教育改革においても、その点はクローズアップされている。

ただ、「受験競争」の過熱ぶりが、私立中高一貫校のせいであるかのような命題の立て方は、問題である。西尾幹二氏がメンバーであったころの中教審では、その旨がはっきり打ち出され、世の話題になったことは記憶に新しい。

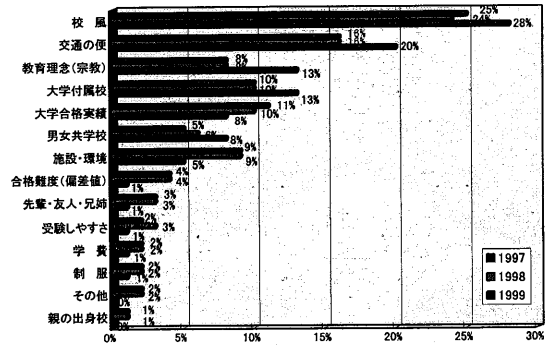
私立中高一貫校は、データを持ち出すまでもなく、いわゆるブランド大学にたくさん進学させている。たしかに私学を志望する保護者の大学に対する関心度は非常に高い。しかし、志望理由の第一は、私学の校風であり、次が交通の便である（図―2①、②）。六年間の学校生活の中で、どういう精神的影響を受けさせたいかが重要なのである。また、アクセスのしやすさは、日々の生活リズムが心身に与える影響を考えたとき重要になる。

この傾向が強いのは、教育理念が志望理由として三番目になっている女子の方である（図―2①）。現状の社会システムでは、まだまだ男性の労働力の重要性が大きい。そういう背景を反映してか、男子の方は、大学合格実績が三番目に気になるらしい（図―2②）。

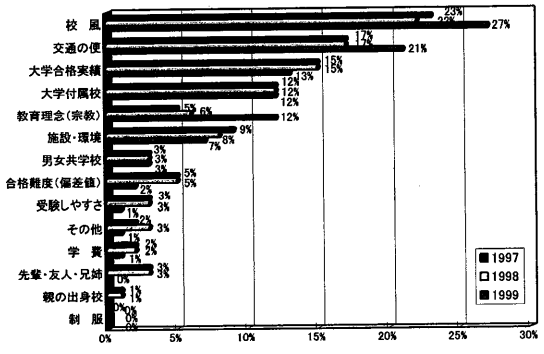
しかし、どちらにしても、人間の成長にとって最も多感で重要な時期をどういう教育環境のなかで過ごさせるかが最重要課題となっているのが、私学選択の本当の理由・動機である。そして、そのうえで子どもの未来を考えるのは、むしろ当然のことであり、「大学受験」というものに興味を抱くことは不自然ではないはずである。

にもかかわらず、多くの私立中高一貫校の存在理由が、大学進学カリキュラムにあるか

図―2 ① 志望理由（女子）



図―2 ② 志望理由（男子）



（日能研　中学入試情報センター調べ）

のような幻想が常識化している。

現代日本人は、このブランド大学進学幻想を作ってしまう危険性をもっており、この眼差しを気にするなという方が難しい状況である。そして、私学における入学試験という制度が、この幻想を作ってしまう可能性を持っている生徒や家庭を、オープンに受け入れざるを得ないのも事実である。

だからこそ、私学は、教育理念にこだわる。学校当局が油断してしまえば、この幻想を自ら受け入れ、自らの手でそれを強化してしまう恐れがあるからだ。エピソード2にあるように、私学の教育環境の中で、生徒たちや保護者たちが、幻想を押し付ける他者の眼差しを気にしていたことに気づき、軌道修正していける能力を養っていくことは、私学の根源的教育動機である。

したがって、私学は、権力的存在に対し常に周辺的存在であり、あくなき真実の問い返しを遂行する表現能力や言葉を大切にするのである。

3 私立中高一貫校の教育実践―横浜中学校のマルチメディア教育に生きる教育理念

❶―エピソード3

「二〇〇二年問題の一つに、総合学習を本校の教育の中でどう位置づけるかという問題がある。様々な体験、多様なものの見方、豊かな知恵が、生徒一人ひとりの中で、内面化され、統合化されて、一人ひとりの個性的精神が成長していく場として、総合学習を位置づける」

❷―横浜中学校のマルチメディア教育の意義

エピソード3は、三輪田学園（東京）の西校長が学校説明会で語った箇所である。教科としての総合学習ではなく、三輪田の教科指導、道徳教育、特別活動、行事指導、教育理念が、生徒の人格が成長する場として有機的につながっているという意味での総合学習を論じている一節である。

もしもこの総合学習についての考えを、他の私立中高一貫校に問えば、多くの私学が西校長の言説を支持し、それぞれの学校における教育の論理を熱く語り始めるであろう。

しかし、この有機的なつながりという、いわば、教育の質は、目に見えないがゆえに、従来から、熱く言説にして表象するしか術はなかったのである。そして、その抽象性ゆえに、理解は誤解に変容し、大学合格実績という数字が一人歩きし出したのは、先に述べた通りである。

ところが、三年ほど前から、横浜中学校の数人の若い教師が創意工夫を凝らしてきたマルチメディア教育が、学内全体に広がり、教育理念とその実践が目に見える形で統合されるに至った。

横浜中学校独自の「家庭と学校を結ぶマルチメディア教育システム」は、生徒、教師、家庭、世界の相互のつながりを、ビジュアルに表象することができる（図―4）。

生徒と教師と家庭が、Eメールやホームページでつながっているため、学校の発信物を共有できる。いろいろな相談もできる。横浜中学校のオリジナル学習ソフトを使って、家庭学習の習慣も身につく。インターネットにそのソフトをつなぐことで、閉じられた家庭学習がオープンシステムになり、一人ひとりの生徒の家庭学習プロセスを教師と共有できるようになる。

こういうシステムを、言説だけではなくビジュアルで説明することを、横浜中学校は可能にしたのである。

従来、有機的つながりは目に見えないものとされてきたために、言説によって理解するしかなかったが、これだと理解が広がらず、教育理念が浸透しないという事態が生じていた。しかし、今回、横浜中学校は、教育理念を、生徒、教師、家庭が一丸となって遂行していける表象を開発したという価値ある役割を果たした。

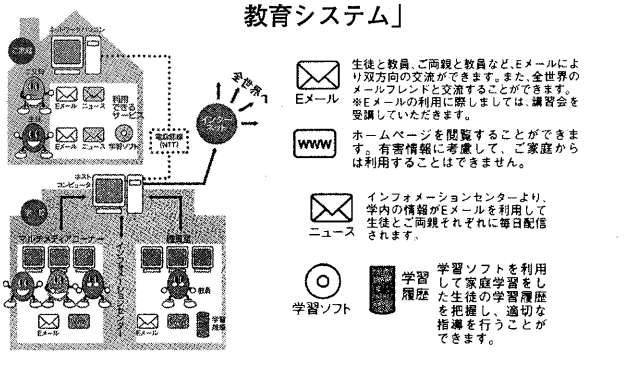
実際、このマルチメディア教育を成功に導くのに大きな貢献を果たしのは、生徒たち自身であった。高校野球選抜大会の直前、ホームページで先輩たちを応援したいという中学生の有志が集結。こうしてできたのが、マルチメディア班である。

彼らは、ビデオ担当、デジカメ担当、インタビュー担当、記事担当、ホームページ担当と相互に協力し合いながら役割を果たし、ニュースを発信していく。

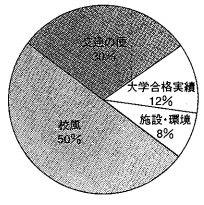
彼らを見守る教師は、次のように語る。

「学校を代表しているという気持ちで、チームワークで取り組んでいる。技術が身につくのはもちろんだが、協力し合って作っているという達成感が重要である。そして、エチケットや取材する相手のプライバシーのような

図―4　横浜中学校の「家庭と学校を結ぶマルチメディア教育システム」



図―3
横浜市内の私立
中高一貫校の志望
理由1位の割合



（ともに日能研　中学入試情報センター調べ）

表―1　横浜市内の私立中高一貫校全体の募集倍率推移と初年度納入金の平均

	1997年募集倍率	1998年募集倍率	1999年募集倍率	初年度納入金平均(円)
全体	5.1	5.1	4.9	971,312
男子	6.0	6.2	5.7	1,040,229
女子	3.9	3.9	3.6	936,927
共学	5.5	5.3	5.6	851,811

問題も考えながら制作していくプロセスは、生徒の可能性をどんどん広げていくだろう」

このようなマルチメディア教育を通して、新しい変化が生じている。クラブ活動という共同の場に参加する生徒が急増している。マスコミ関係で活躍したい。文系ではなく、理系に志望を変えたい。ホームページで小説を発表して自信を得て、作家になりたいなど人生に目的を持てる生徒も増えているのである。

しかし、この変化は、同時に、お互いを認め、励まし合うという創立以来の気風を貫徹させているのである。

このように、教育理念とその実践が有機的に統合されているという表象を開発した横浜中学校の教育は、二十一世紀教育の大きなヒントとなるはずである。

4 展望

❶エピソード4

私学は常に、先見性を発揮し時代を先取りしてきた。建学の精神の一貫性と「時代の変化への即応性」の矛盾を統一したところに学園の独自性が生まれる。その最も重要な視点は「われわれは周囲の人の眼を意識して実行しているのではない。ひたすらに、生徒をみつめてただ実行するだけである」

❷二十一世紀教育に必要なこと

エピソード4は、神奈川学園が世に問いかけている「二十一世紀教育プラン」の冒頭部分からの引用である。具体的な内容は学園のホームページで閲覧できる。

神奈川学園でも横浜中学校のような新しいマルチメディア教育を展開しているが、二十一世紀の人間教育の課題を、「自立」「技術」「共生」という三つの柱で捉え返し、上から押し付けるのではなく、自ら学び発見する人間教育を実践する一つの柱として考えている。横浜中学校のようにマルチメディアを全面的に展開していくわけではないところに、根源的教育の動機は似ていながらも、教育実践の大きな差異がある。

さて、このプランを策定し、実施する際に、神奈川学園では特徴的なアクションを起こしている。アメリカの大学のシラバスそのものではないが、そのエッセンスをとり入れた。

すべての教師の授業や生活指導の方法について生徒全員からアンケートを取ると同時に、生徒一人ひとり、授業にどう取り組み、生活指導に対しどのように応じているかについて回答しなければならない。

この行為は、学校の文化を、ただ評論家的に指摘するだけではなく、教師も自己も見つめつつ、自分も参加しながら作っていく行為につながるだろう。そしてまさしく、自分の人生を一人ひとり考えるチャンスを与えたいという神奈川学園の気風が貫徹することにもなる。さらに、教師たちは、自分たちの教育について、ディスカッションするチャンスを作ることに労を惜しまない。二十一世紀の教育を考える上で最も大切なことは、実はこのオープンな討議をいかにしていけるかなのである。

二十一世紀教育の本当の突破口は、上からの教育改革が提示したり、マスコミがわかりやすく示してくれたりする問題を解決するだけではなく、市民一人ひとりの問題をいかに普遍的な問題としてとりあげ、解決の合意を形成していけるかにかかっている。

市民一人ひとりの問題をオープンな討議として扱っていくとなると莫大な量をどう処理するかという壁にぶつかるが、幸いこの量的なものを解決するマルチメディアという技術が急速に進歩し、まさに個人単位にまで普及しつつある。

また、討論するには、普遍的と思われる理念の絶え間ない洗い出しと議論を投げかける側の価値基準の自己批判という言説が必要になる。たしかに、コールバーグにしろ、ハーバマスにしろ、こういう討論の段階（表―2の6と7の段階）は、理想的状況であり現実に存在するのは難しいと論じているが、挑戦する価値は認めている。

とにかく、このような討論は、横浜中学校では、少数の教師が初めの一歩を踏み出した勇気から始まった。一人ひとりの生徒の要望に応えるべく、日夜議論をしている実例は、すでに神奈川学園にある。横浜市の他の私学でも同様のプロセスが、展開されているはずなのである。

〈(株)エヌ・ティ・エス NTS教育研究所部長〉

表―2 「ハーバマス＆コールバーグ」モデル

年齢	道徳意識のレベル	道徳意識の発達段階		コミュニケーション行為の状態
大人 高校生	脱慣習的な原理に導かれるレベル	7	人類普遍的原理を理解して、それに従う	人類普遍の原理が、あらゆる当事者によって強制なく、受け入れられるように、当事者すべてが原理の解釈を議論し、理解しながら、合意形成の議論に参加する。
		6	人類普遍的原理に基づいた規範に従う	社会契約的、功利主義的原理を超える人類普遍的原理に基づいた規範に従い合意形成を行う。
		5	社会契約的、功利主義的正義の原理に基づいた規範に従う	社会契約的、功利主義的原理に照らし合わし、妥当と判断できる社会的に制度化されたルールに基づいて同意形成を遂行していく。
中学生	慣習的レベル	4	社会のシステムに一致するような行為	社会的に制度化されたルールに基づいて同意形成を遂行していく。
		3	身近な集団の期待に同調	身近な集団が期待するルールに従い、信頼関係、忠誠心などを形成する。
小学生	前慣習的レベル	2	他人の利害と自分の利害が合致するように行為する	目の前の他人と自分の利害が等しい状態になるようなルールを捜し、それに従う。
		1	懲罰と服従	懲罰を避けるために、物理的危害を加えないように、権威を持った人に服従する。

このモデルはユルゲン・ハーバマス「道徳意識とコミュニケーション行為」（岩波1991年）と兵庫教育大の荒木紀幸教授の「道徳性の発達と構造」モデル（1990年）を参考に制作した

注 (株)エヌ・ティ・エスは、八七年に日能研から分離独立。成績データベースの構築業務から始まり、現在は、この情報処理技術をベースに、私立中高一貫校を中心に、学習環境に関連するソフトパワー・サポート事業を展開している。